性格傾向と下垂体前葉予備能との関連性:
心身相関に関する神経内分泌学的研究

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Ishii, Yo
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14840

学位授与番号	医博乙第1087号
学位授与年月日	平成2年3月20日
氏　　名	石井　陽
学位論文題目	性格傾向と下垂体前葉予備能との関連性ー心身相関に関する神経内分泌学的研究
論文審査委員	主査　松田　保
	副査　竹田亮祐
	山口成良

内容の要旨および審査の結果の要旨

これまでに、性格傾向とストレスに対する下垂体前葉ホルモン反応の個体差との関連性や、下垂体前葉予備能とうつ病や神経性食思不振症などの情緒障害との関連性が研究され、上位脳中枢機能を下垂体機能から探ろうとする試みがなされてきた。今回、性格傾向と下垂体前葉機能の個体差との関連性を検討し、以下の結果を得た。

1. 健常成人男子96名に、6つの心理テストすなわち、Cornel Medical Index, Self Rating Questionaire for Depression, Maudslay Personlity Inventory, Manifest Anxiey Scale およびPicture－Frustration Studyを施行した。数量化理論第三類によって、全評点から以下の4つの性格特性を得た。すなわち、1）攻撃的神経症的傾向、2）常識的適応性、3）自我強調、4）罪償感。
2. この4つの性格特性を指標としたクラスター分析によって、被験者を以下の5群に分けることができた。すなわち、1）正常型（n＝44）、2）罪償型（n＝16）、3）不適応型（n＝4）、4）自我強調型（n＝9）、5）過剰適応型（n＝6）。
3. 被験者のうち13人を対象に、3か月間隔で年4回TRH、LH－RHテストを施行してTSH、prolactin、LHおよびFSHについて反応性の年間恒常性を検討した。また、25人を対象に通常量負荷と10分の1量負荷のTRH、LH－RHテストを施行した。その結果、4種のホルモンの基礎値の高さと反応性の良し悪しに認められた個体差には年間恒常性があり、また、負荷量を変えてもこのような個体差が一定であったことから、ヒトの下垂体前葉予備能には恒常的な個体特異性のあることが示唆された。
4. 性格類型間で下垂体前葉予備能を比較すると、過剰適応群では正常群および罪償群よりもprolactin基礎値が低く、またLHの反応性が自我強調群および罪償群よりも低かった。

以上の結果より、ヒトの下垂体前葉予備能には恒常的な個体特異性があり、また、その個体特異性と性格傾向とに相関が認められ、性格傾向を生理機構としてとらえ得る可能性が示唆された。

以上、本研究は神経内分泌学的に心身相関を明らかにした点で価値ある論文と評価された。